

多様な考えに触れ，思考を深める道徳授業づくり

～授業のねらいに迫る発問の工夫～

糸満市立潮平小学校教諭 長門 照乃

I テーマ設定の理由

昨今，社会の情報化・グローバル化が進み，私たちのライフスタイルも大きく変化し，それに伴い人々の価値観も多様化している。物事の捉え方や考え方も様々である社会において，人々が共通理解を図ることは難しくなっている。その中で，変容する人々の意識や考え方に柔軟に対応し，他者とかかわり，よりよく問題に対処しながら生きていくためには，一人一人の価値観の違いを認め合いながら，互いに歩み寄ることができる協調的な力が求められる。一方，人とかかわり，切磋琢磨する機会が減少している中，いじめや不登校，暴力行為といった子どもたちの問題行動の深刻化が指摘されており，規範意識の低下や人間関係の希薄化も危惧されている。このような状況を受け，子どもの心の問題に目が向けられ，道徳教育の重要性は増している。平成27年の一部改正学習指導要領では「特別の教科 道徳」と位置づけられ，「物事を多面的・多角的にとらえ，自己の考えを深める学習」がより一層求められている。

これまでの授業実践を振り返ると，教師主導で，教師の意図に沿った価値を獲得させるかに焦点を当て，子どもたちに自分の問題として考えさせていなかった。また，個人の内面的な問題としてのみ道徳性を捉えていたことで，道徳的価値が子ども一人一人の思考レベルにとどまっておらず，多様な考えを表現させ，思考を深めさせるような手立てができず，みんなで練り合うまでに至らなかった。そこには，子どもたちが多様な価値観や意見をもとに価値を吟味する，集団社会や他者とかかわりの中で捉えるという視点が弱かったと考える。

こうした授業では，子どもたちは，教師の意図する価値を唯一正しいものとして意識的に答えていた。例えば授業の中では，友達と仲良くすることの大切さを内面化しているように感じるが，いざ学校生活や学級集団の中では，トラブル（対立）が起こった時に，友達とどのようにかわり，どう行動すればよりよく対処できるか考えることが未熟であった。このような状況を踏まえ，道徳授業の中で，お互いの意見を聴き合う学習活動を行い，多様な考えに触れ，練り合い，それぞれの思考を深め合うことで道徳性を育むことが重要である。

子ども一人一人に多様な考えに触れながら授業のねらいに迫らせるためには，個々の心情のみを問うような意見交流ではなく，自分の問題として価値について考えさせ，思考を深めさせる授業展開が必要である。

そこで本研究では，子どもたちの多様な考えを引き出し，思考を深めさせるために，子どもの思考の流れに沿った発問の工夫をすることが重要であると考え，本テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

道徳授業において，授業のねらいに迫る発問の工夫を行うことにより，子どもたちが自分の考えを出し合い，多様な考えに触れることで，道徳的価値について思考を深めることができるであろう。

2 検証計画

検証授業の対象：糸満市立潮平小学校2年4組 27名			
	検証の場面	検証の観点	検証の方法
① 検証授業	展開	授業のねらいに迫る発問の工夫により、多様な考えに触れ、道徳的価値について思考を深めることができたか。	・授業観察(発言) ・ワークシート ・振り返りシート
② 検証授業前後の調査	道徳授業に関する実態調査	事前(平成27年6月) 事後(平成27年7月)	・アンケートの比較・分析
③ まとめ	道徳授業において、授業のねらいに迫る発問の工夫を行うことは、子どもたちが自分の考えを出し合い、多様な考えに触れ、道徳的価値について思考を深めることに有効だったか。		上記①、②の結果

Ⅲ 理論研究

1 多様な考えに触れ、思考を深める道徳授業について

(1) 多様な考えに触れ、思考を深めることについて

北川・平田(2008年)は、「社会変化に対応する人間を育てる教育は、従来の価値観を無批判に受け入れるのではなく、様々な価値観に触れながら、一人一人が自ら判断していくような『学びの場』を創出するところから始まる」と述べている。価値が多様化した社会において、未来を生き抜く子どもたちにとって必要になるのは、多くの情報や多様な価値の中から、自分に必要なものを選び取る力であり、それらの良さを取り入れながら、自分の生き方・人生を自分で創り上げていく力だと考える。つまり、一人一人の考えを出し合い多様な考えに触れ、その良さを吟味しながら、自分の考えについて振り返って思考を深めることが必要であると考えられる。

(2) 多様な考えに触れ、思考を深める授業の工夫

上地(2011年)は、「価値多様化社会における道徳教育は、人々の差異を無視して統一性を強いるのではなく、個々人が異なるという差異から出発しつつ、いかにして社会の中に連帯感を作り出すかという課題が重要である」と述べている。そのため、一人一人の価値観の違いを尊重しつつ、子どもたちが主体的に共有できる価値の正しさを自分たちで創り変える授業が必要であると考えられる。上地(2011年)は、「道徳では、子どもたちが『考える』ことがますます重要となり、その考えたことを個人の頭の中に閉じ込めておくのではなく、クラスの仲間と共にその考えの『正しさ』を吟味し、話し合うことで共有を図ることが必要である」と指摘している。道徳授業の中で、時代とともに変化していく道徳的価値の正当性をみんなで追求していくことが重要だと考え、子どもたちが自分の考えを出し合い、互いに納得できる規範やルール、道徳的価値を共有する授業を展開していきたい。

道徳授業のねらいは、道徳的な価値について思考を深める過程を通して、道徳性を発達させることにあると考えられる。渡邊(2013年)は、道徳性の捉えについて、「集団や社会の中で人と人がかかわり合い、自分(個人)としてのあり方を調整しながら完成させるという視点が必要である」と説いている。コミュニケーションを通して、一人一人がかかわりを持ち、互いを認め合う集団のあり方やルールを自分たちの問題として受け止め、考えさせる授業展開の工夫が必要である。子どもたちが道徳的価値について自分の問題として考え、多様な考えを出し合い学級のみんなで吟味し、自分たちで価値を創造していく授業展開を図るためには、発問を工夫することが大切だと考える。

2 授業のねらいに迫る発問の工夫

(1) 発問について

小学校学習指導要領解説の特別の教科 道徳編では、「教師による発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深める上で重要であり、発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出されるためにも、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えたりする発問などを心掛けることが大切である」と示されている。

坂本（2004年）は、「出す発問」と「深める発問」を設定し、「出す発問」とは、「子どもたちが今もっている価値観を表出させ、それに気づかせる発問である」と述べている。具体的には、「～は、この時どんなことを考えているでしょう」と資料の主人公の気持ちを問う発問や「～は、この後、どうするでしょう」と行為を問う発問である。主人公に寄り添わせながら、気持ちの有り様や行動につ

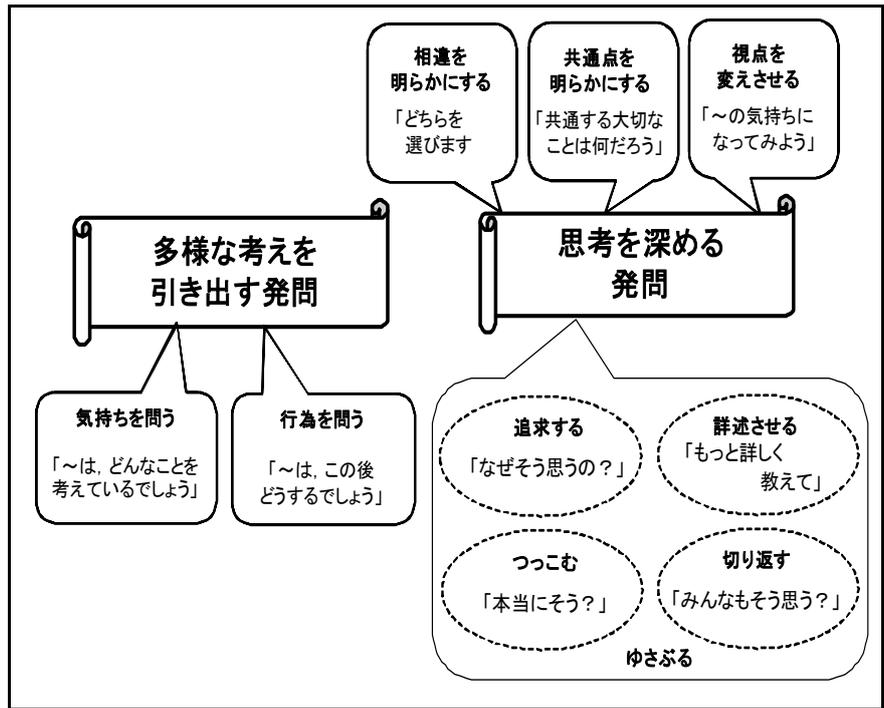


図1 発問の種類

いて問うことで、子どもたちの多様な感じ方や考え方を引き出すことができると考える。

また、坂本は、「深める発問」とは、「自分の価値観が強化されたり、新たな見方や考えが付加されたりすることで、価値観が深まったり広がったりする発問である」と述べている。具体的には、「よりよいのは、どれでしょう」と相違点を明らかにする発問や「どの考えにも共通する大切なことは何だろう」と共通点を明らかにする発問、「～さんの気持ちになって考えよう」と視点を換えさせる発問である。これらの坂本の発問を参考にし、図1のように「多様な考えを引き出す発問」と「思考を深める発問」の2つの発問を設定し、授業での発問として効果的に取り入れる。

さらに、長崎県教育センター「さあ、道徳の授業をはじめよう！」（2004年）等を参考しながら、「ゆさぶる発問」を構成し、新たに加えた。具体的には、「なぜそう思うのか」と問い返すことで追求する発問や「本当にそうなのか」というつつこむ発問、「もっと詳しく教えて」という詳述させる発問、「みんなもそう思うか」という切り返す発問等を設定し、これらの発問を効果的に取り入れることで、子どもたちの思考を深めることができると考える。

(2) 授業のねらいの吟味

道徳の時間の主題（道徳的価値）は、子どもの実態を踏まえたねらいと資料をもとに構想される。資料分析は、資料内容を教師自身が捉え、授業に活かす切り口などを見つけるために行うことであ

り、子どもの視点から資料を多面的に見る力が求められる。資料分析を通して、教師は、この資料の特質を活かしながら子どもたちに捉えさせたい主題について吟味する。加藤（2012年）は、「主題は、子どもたち自身が抱える問題意識を具体的な言葉で表現したものであり、子どもたちが日々希求しているものに、資料を重ねる」ことを説いている。子どもたちに何を考えさせたいかを重視しながら、資料選びや資料分析をすることが必要であると考え。

また、授業の善し悪しを決める基準の一つとして、ねらいの達成が挙げられる。服部（2015年）は、「授業のねらいや内容に照らして子どもの評価を行うためには、1時間で達成可能な具体的なねらいを立てる」「子どもにとっての何らかの新しい学びを想定し、資料の特質を生かした具体的なねらいをたてる」ことが重要であると述べている。1時間の授業の中での子どもの変容を意図しねらいの達成に向けて資料をどう活用し、子どもたちに何を学ばせるかを明確にすることが授業改善の第一歩だと捉える。これらの資料分析や資料の特質を活かしたねらいを設定することにより、子どもたちが授業のねらいに迫れるような発問づくりに活かすことができると考える。

(3) ねらいに迫る発問の工夫

加藤（2012年）は、「教師の問いから子どもたち自身の問いにシフトすることが大切であり、子どもたちが主題について考えたいという問題意識を持つことにより、意欲的に学習に取り組むことができる」と述べている。そこで、導入段階では、主題について子どもそれぞれがもっている価値の自覚を引き出したり、資料への興味・関心を引きつける発問をする。そうすることで、子どもたちは主題に対して自分の事として問題を捉え、資料を読み進めながら考えていくことができると考える。また加藤は、「子どもたちに『深く考える発問』を投げかけることで、じっくりと考えたり、友達同士が異なる意見を交わしたりしながら練り上げる過程を重視し、資料の全体を把握した上でテーマを設定し、その解明に時間をかけるような発問を設定する」ことを提案している。そこで、授業の山場である中心場面において、多様な考えを引き出す発問により、登場人物に寄り添いながら一人一人の見方や感じ方を表出させることができ、また、思考を深める発問により、様々な考えをもとに道徳的価値について思考を深めさせることができると考える。そのためには、子どもの思考の流れに沿って、資料の特質を活かしたねらいに迫る発問を構成することが必要となる。さらに、終末では、授業での新たな気づきや学びを問う発問により、子どもたちの思考の深まりをみることができると考える。

(4) 思考の深まり（ねらいとする価値への追求の見通し）

眞榮城ら（2014年）は、ねらいとする価値の追求の見通しを3段階で構成し

（図2）、「一般的・常識的な価値理解をみんな確認する段階（Ⅰ段階）、資料を通して授業でさらに上乗せし、一人一人の受け止め方や捉え方を強化させる段階（Ⅱ段階）、そして、一般的な理解を踏まえて、さらにもう一深まる理解（Ⅲ段階）を目指す」と述べている。この3段階の考えの深まりを踏まえた授業のねらいを設定することで、子どもたちの思考を深める発問づくりに活かすことができると考える。

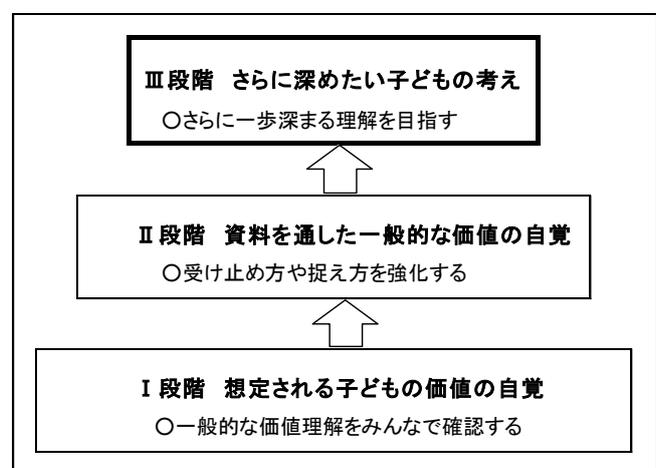


図2 ねらいとする価値への追求の見通し

IV 検証授業

1 検証計画

回	実施日時	資料名	従来のねらい	授業のねらい	評価方法
1	6月26日(金) 5校時	1-(1) 物を大切に 「おじさんの かさ」 (絵本)	身の回りの物を大切に しようとする心情を育て る。	物には用途に応じた使い方が あり、使いながら大切にす ることのよさに気づくこと ができる。	授業観察 ワークシート 自己評価 振り返りシート
2	7月2日(木) 2校時	2-(2) 思いやり・親切 「はしの上の おおかみ」 (文科省わた したちの道徳)	身近な人たちに温かい 心で接し、親切にしよう とする心情を育てる。	おおかみの変容から、つな がる思いやりについて考え、 優しくされると優しくした いという思いや行動につな がることに気づく。	
3 本時	7月15日(木) 5校時	3-(2) 動物愛護 「はねのない かぶと虫」 (副読本)	かけがえのない生命に 気づき、生命あるものを 大切にしようとする心情 を育てる。	必死に生きようとするはね のなにかぶと虫に対する主 人公の思いに寄り添い、命 ある限り精一杯生きること のすばらしさに気づき、 命あるものを大切にしよう とする心情を育てる。	

2 検証授業本時の学習

(1) 主題名 命あるものを大切に【3-(2)】

(2) 資料名 はねのないかぶと虫 (出典：みんなのどうとく 2年 沖縄県版 学研)

(3) 主題設定の理由

① ねらいとする道徳的価値

本主題の内容項目は、第1学年及び第2学年の道徳内容3「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」の項目(2)「身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する」ことである。

動植物は自然環境の中で生きており、それぞれの環境に適応して生活を営んでいる。人間も地球に住む生物の一員であり、環境とのかかわりを抜きにしては生きていけない。自然や動植物を愛し、自然環境を大切にしようとする態度は、地球全体の環境の悪化が懸念されている現在、特に身につけなければならない道徳的価値である。

低学年では、自然や動植物と直接触れたりすることを通して、やさしい心を養い、生き物を可愛がり、世話することの良さを見いだすことによって生き物を大切にすることが自覚できるようになることが求められている。それに加えて、動物の飼育には「死」がつきものであり、避けては通れない。限られた命だからこそ、精一杯がんばり、たくましく生きようとするすばらしさを感じとらせることで、動植物を大事に守り育てようとする気持ちを育むことにつながると考える。

② 児童観(省略)

③ 資料観

本資料は、弟が保育園からもらってきたはねのないかぶと虫を大切に飼うが、死んでしまうという話である。主人公の「ぼく」は、はねのないかぶと虫を飼育するうちに、そのかぶと虫を大切に思うようになっていた。「ぼく」は、はねがないにもかかわらず必死になって飛ぼう、生きようとするかぶと虫の姿に感動して「がんばれ」と応援する。けれども、9月にかぶと虫は死んでしまい、「ぼく」は弟と一緒に、かぶと虫のおほかをつくってあげ、心の中で「ありがとう」とよびかける。

はねのないかぶと虫を飼育し、飛ぼうとするかぶと虫を応援する主人公「ぼく」の気持ちに共感させながら、学級の子どもたちの今までの生き物とのかかわり方を想起させ、死んでも思い出として残るほどの尊い生命のすばらしさに気づかせることができる効果的な資料であると考えられる。

④ 指導観

子どもたちは、生活科の栽培を通して、ミニトマトやオクラが数多く実を結び、生命を育む喜びやそれを収穫して味わう喜びを感じることができている。また、友達が獲ってきたクワガタムシを学級で飼育し、エサのゼリーをあげたり、土をほってすみかを整えたりして飼育する喜びを味わうことができている。

そこで、これまでの活動の中で育ててきたやさしく生き物に接しようという心情を活かし、前述した眞榮城らの図を参考に、ねらいとする価値への追求の見通し（図3）を作成し、ねらいに迫る発問を工夫する。

導入では、生活科や家庭での飼育の様子を想起させながら、育てた喜びや死んだことの悲しみを語らせ、価値への方向づけを図りたい。

展開前段では、場面絵を使って視覚的に登場人物の様子や状況の把握させる。多様な考えを引き出す発問により、主人公「ぼく」の気持ちに寄り添わせ、はねがないにもかかわらず一生懸命飛ぼうとするかぶと虫の様子を通して、かぶと虫を応援したくなる気持ちや感動する気持ちに共感させ、死んでしまうことが悲しいだけでなく、感謝の気持ちにかわっていくことに気づかせたい。

展開後段では、世話する「ぼく」の視点から、はねのないかぶと虫のたくましい生き方に目を向けさせ、思考を深める発問を行う。また、グループでの話し合い活動を取り入れ、力強くはねを動かそうとする様子は、与えられた命で精一杯生きようとするすばらしい姿・生き方であることに気づかせたい。子どもたちが互いの意見を聞きながら、多様な考えに触れ、学級全体の練り合いに発展させ、様々な意見をもとに命を大切にすることについて深く考えさせ、命あるものを大切にしようとする心情を育てていきたい。

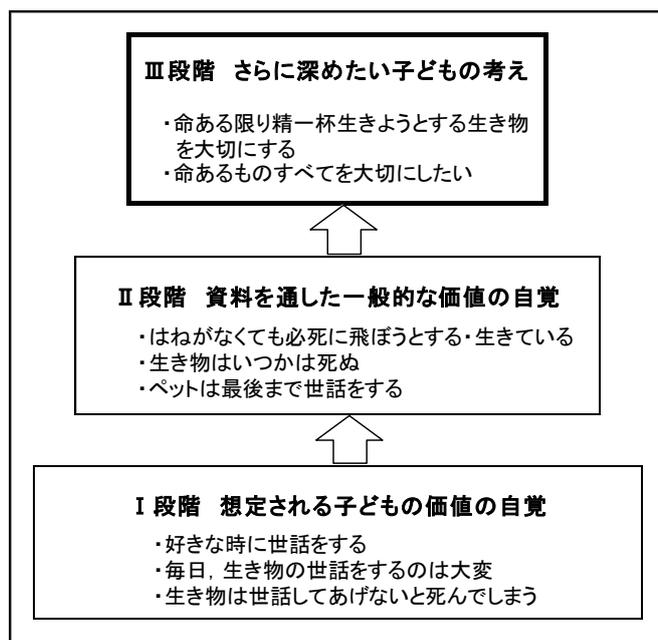


図3 ねらいとする価値への追求の見通し

(4) 本時のねらい

必死に生きようとするはねのないかぶと虫に対する主人公の思いに寄り添い、命ある限り精一杯生きることのすばらしさに気づき、命あるものを大切にしようとする心情を育てる。

(5) 授業仮説

「ぼく」の気持ちに寄り添わせたり、はねのないかぶと虫の様子に目を向けた発問を工夫することにより、限られた命で精一杯生きることのすばらしさについて多様な考えを出し合い、世話する喜びを感じながら、命あるものを大切にしようとする良さについて思考を深めることができるであろう。

(6) 準備

- ・場面絵
- ・発問用短冊
- ・ワークシート

(7) 展開

(※ 思は、思考を深める発問)

	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	○指導上の留意点 ■評価の観点と評価方法
導入 5分	1 今までの飼育の様子を想起させる。 どんな生き物を飼ったことがありますか。 生き物を飼った時に、うれしかったことや大変だったことはどんなことでしょうか	<ul style="list-style-type: none"> ・エサをあげると喜んでくれた ・赤ちゃんがうまれた時は、うれしかった ・毎日のエサや散歩が大変 ・死んだ時は悲しかった 	○飼育したことのある子に経験を思い出させ、育てた喜びや死んだことへの悲しみを語ることで、価値への方向づけを図る。
展開 35分	2 資料「はねのないかぶと虫」を読み、「ぼく」の気持ちについて考えさせる。(15分) はねのないかぶと虫を見た時、「ぼく」はどう思ったのでしょうか。 はねのないかぶと虫が飛ぼうとした時、「ぼく」はどう思ったのでしょうか。 思はねがあるかぶと虫だったら？ はねのないかぶと虫がしんでしまった時、「ぼく」はどう思ったのでしょうか。 3 価値をさらに追求する。(20分) どうして「ぼく」は、はねのないかぶと虫をさいごまでかうことができたのでしょうか。 思世話をしたのは「ぼく」なのに、かぶと虫に「ありがとう」って言ったんだよね。 思はねがないのに2ヶ月も生きられたのはなぜかな。 グループでの話し合い→全体での練り合い ① グループごとに一人一人が意見発表 ② 質問タイム ③ 学級全体に広げる	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物は、ぼく、弟、はねのないかぶと虫、お母さん ・はねがないって変 ・かっこいい方がよかった ・よく生きているな ・はねがなくてかわいそう ・大丈夫かな ・飛ぼうとしてすごい ・がんばれ ・死んでしまってさびしい ・はねがないのにがんばって生きていた ・もっと長生きしてほしい ・一生懸命お世話をしたから ・楽しんで飼育できたから ・かわいがったから ・がんばれって応援しながら育てたから ・はねのないかぶと虫が、がんばってとぼうとしていたから ・精一杯生きてくれたから 	○場面絵を使いながら、物語の内容や登場人物の様子を押さえる。 ○物語を4つの場面に分け、男の子の思いに寄り添わせながら、はねのないかぶと虫に対する思いや大切に思う気持ちの高まりに共感させたい。 ○はねがないことでどんな支障があるのか考えさせ、欠点や弱さを抱えながらも懸命に生きようとする姿に気づかせたい。 ■仮説の検証 発問の工夫により、命ある生き物をお世話することの良さに目を向けることができたか。(授業観察、ワークシート) ○友達のを考えを聞きながら、自分の考えを深めていくようグループでの話し合い活動を取り入れる。 ○グループで出た考えを学級全体での練り合いにつなげる。
終末 5分	4 今日、学んだことを振り返る。 今日の学習で、考えたことや心にのこったことを教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・はねがなくても、飛ぼうとしたのはすごい ・生き物の世話をすることは楽しい 	○子どもたちの意見や考えをつなげて、今日のまとめにする。

(8) 評価

- ・発問の工夫により、世話する喜びが感じられるような考えができたか。
- ・命あるものを大切にする良さについて思考が深まったか。

3 授業仮説の検証

本時の授業仮説について、授業観察、ワークシート、自己評価、振り返シートをもとに表1を作成し、これに基づいて考察する。

表1 評価（対象児童25名）

検証場面	評価規準			検証方法	検証結果 II III合計
	I：想定される 子どもの価値の自覚	II：資料を通した 一般的な価値の自覚	III：さらに深めたい 子どもの考え		
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・すきな時に世話をする ・毎日、生き物の世話するのは大変 ・生き物は世話してあげないと死んでしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・はねがなくても必死に飛ぼうとする・生きている ・生き物はいつかは死ぬ ・ペットは最後まで世話する 	<ul style="list-style-type: none"> ・命ある限り精一杯生きようとする生き物を大切にする ・命あるものすべてを大切ににする 	授業観察 ワークシート 自己評価 振り返シート	72% (18名)
	20% (5名)	44% (11名)	28% (7名)		

※ 未記入8% (2名)

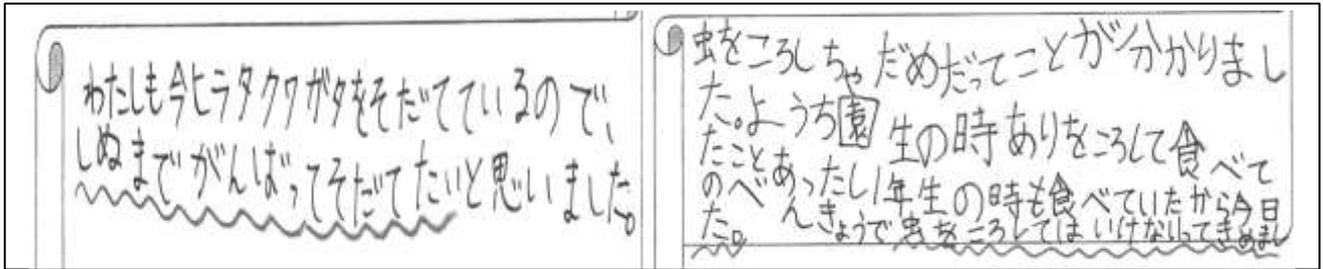
- (1) 「ぼく」の気持ちに寄り添わせたり、はねのないかぶと虫の様子に目を向けた発問を工夫することにより、限られた命で精一杯生きることのすばらしさについて多様な考えを出し合い、世話する喜びを感じながら、命あるものを大切にする良さについて思考を深めることができたか

資料分析を通してねらいに迫る発問を構成し、中心発問や基本発問を設定した(資料1)。中心場面に至るまでの基本発問では、「ぼく」の気持ちに寄り添わせ、はねのないかぶと虫を大切に思う気持ちの高まりに共感させた。すると、「こんな虫もいるのかな」「害虫みたい」という意見から、「飛ばせてあげたいな」という気持ちになり、「家族が減ったみたいで寂しい」「もっと元気にさせてあげたかった」という気持ちの高まり

	場面	発問	発問の意図
展開	①はねのないかぶと虫を見た時	はねのないかぶと虫を見た時、「ぼく」はどう思ったのでしょうか。(基本発問)	はねがなくて変だな、元気な虫がよかったなという「ぼく」の気持ちを捉えられるようにする。
	②はねのないかぶと虫が飛ぼうとした時	はねのないかぶと虫が飛ぼうとした時、「ぼく」はどう思ったのでしょうか。(基本発問)	はねがなくても頑張って飛ぼうとするかぶと虫を応援する「ぼく」の気持ちに共感できるようにする。
	③はねのないかぶと虫がしんでしまった時	はねのないかぶと虫がしんでしまった時、「ぼく」はどう思ったのでしょうか。(基本発問)	はねのないかぶと虫を大切に思う「ぼく」の気持ちの高まりを捉えられるようにする。
	④はねのないかぶと虫をお墓にうめている時	どうして「ぼく」は、はねのないかぶと虫をさいごまでかうことができたのでしょうか。(中心発問)	はねがないという欠点や弱さを抱えながらも懸命に生きていたかぶと虫の生きる姿を捉えられるようにする。

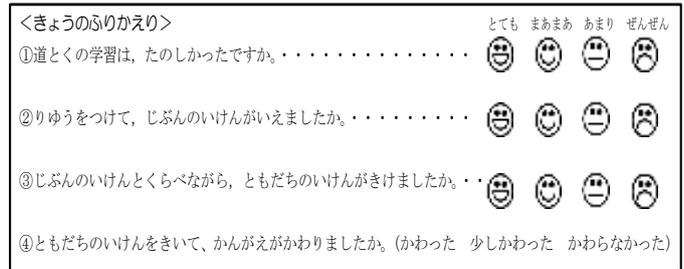
資料1 「はねのないかぶと虫」の発問の構成

が感じられる意見が出された。さらに、中心発問では、はねのないかぶと虫が死ぬまで世話をすることができた「ぼく」の様子や心情について考えさせた。その結果、「はねのないかぶと虫を飛ばせてあげたかった」「結局、死んじゃったけど、今まで一緒にいてくれてありがとう」「はねはなかったけど生きていたから」等の意見が多く出され、世話する喜びを共有することができた。また、子どもたちのワークシートの記述によると、授業を通してはねのないかぶと虫の世話について考えたことにより、自分の飼っているペットや自分の周りの生き物に視野を広げて考え、命あるものを大切にしようとする考えも見られた(資料2)。



資料2 授業のワークシートの児童の記述

しかし、はねのないかぶと虫が飛ぼうとする姿を通して、精一杯生きようとするかぶと虫の生き方までは行き着けなかった。その原因として、はねがないから頑張っても飛べないことの押さえが足りなかったことと、それでも必死に飛ぼうとするかぶと虫に目を向けさせる思考を深める発問（ゆさぶり）が不十分だったことが挙げられる。また、表1の結果より、思考が深まらなかった子（Iの段階）が20%、ワークシートに未記入の子も8%いたことから、2年生が答えやすいように具体的に「心の中で何と言ってあげますか」等の発問を精選する必要がある。さらに、授業後に感想を聞くと、「書く時間が足りなかった」「考えていたが、何と書いていいか迷ってしまった」という声もあったことから、記入する時間の確保と自分の考えを書く力の育成も課題として残った。



資料3 授業のワークシート（自己評価）

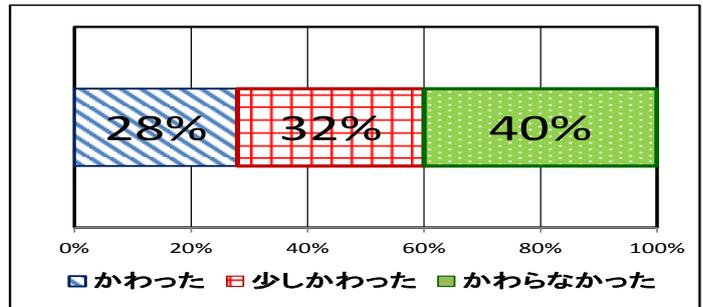
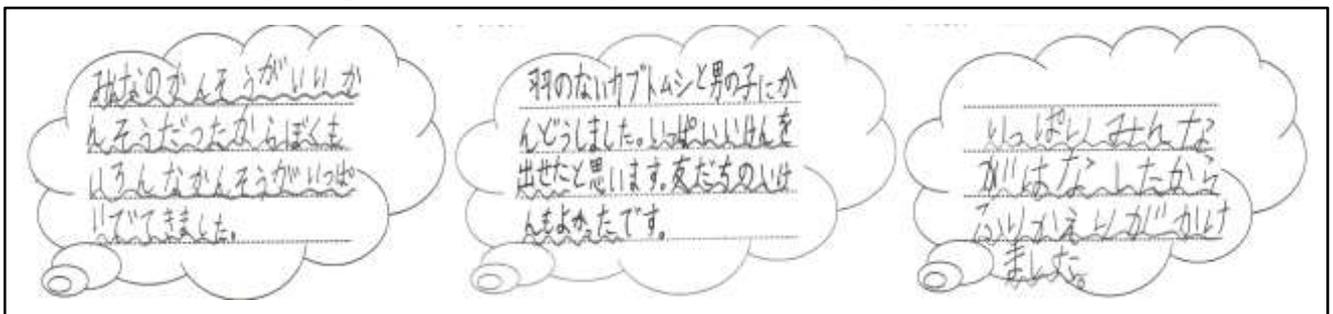


図4 友達の意見を聞いて、考えがかわりましたか

終末では、ワークシートに自己評価欄を設け、授業の振り返りをさせた（資料3）。その結果（図4）から、「友だちの意見を聞いて、考えが変わった・少し変わった」という子が60%おり、グループでの話合いで様々な考えに触れることで、考えに変容が表れたと考えられる。資料4は、「考えが変わらなかった」と答えた子どもたちの振り返りシートの記述である。考えは変わらなかったものの「みんなの感想が良かったから、ぼくもいろんな感想がいっぱい出た」「みんなで話したから振り返りが書けた」等のように友達の考えの良さに触れ、自分の考えに活かしたことが分かる。



資料4 子どもたちの振り返りシートの記述

以上のことから、「ぼく」の気持ちに寄り添わせたり、はねのないかぶと虫の様子に目を向けた発問を工夫することで、世話する喜びを感じながら、命あるものを大切にする良さについて思考を深めることができたと考える。

V 研究の結果と考察

研究の考察は、事前・事後に実施したアンケート、授業のワークシートや振り返りシートの記述をもとに行った。

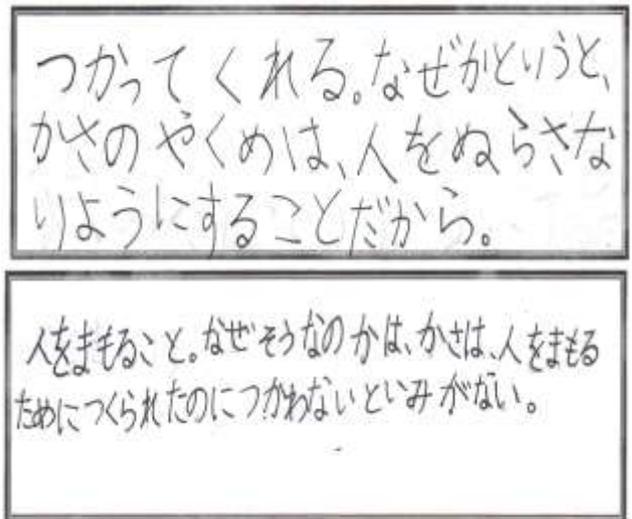
1 ねらいに迫る発問の工夫によって、子どもたちが自分の考えを出し合い、多様な考えに触れ、道徳的価値について思考を深めることができたか

第1時「おじさんのかさ」の学習では、資料5のように発問を構成し、おじさんの心情に寄り添わせる発問により、かさを使わない場合と使った場合とを比較しながら、かさへの思いや扱い方について考えさせた。すると、「きれいなままで置いておきたい」「ぬらしたり、汚したくない」という意見から「本当に楽しい雨の音が聞こえてうれしい」「ぬれることが、かさらしい」という多様な考えが出された。さらにかさの立場に目を向けさせる発問により、物にとってはどういう使われ方が好ましいのかを考えさせた。その結果、「大切にしてくれてありがとう」「でも、人を雨から守っていない」という意見から「役目を果たせてうれしい」「今度はおじさんを雨から守れてうれしい」という考えの変容した発言が多く出た。さらに、授業のワークシートの中心発問に対する記述（資料6）では、用途に応じた使い方をし、使うことで大事にするというねらいに迫る考えが多く出たことから、かさを使う喜びについてはしっかり考えさせることができた。しかし、課題として、長持ちできるように後片付けをすることの良さに目を向けさせることが不十分であった。「壊してしまっても大事にしていると言えるのか」等のゆさぶりが弱かったと考える。子どもたちの思考に沿った思考を深める発問も構成に含め、吟味しておくことが必要だと考える。

第2時「はしの上のおおかみ」の学習では、資料7のように発問を構成し、おおかみの気持ちに寄り添わせ、優しくされる側に目を向けさせる発問により、優しくされた者は、行動や気持ちはどう変容するかについて考えさせた。その結果、「自分が1番強いと思っている」「弱いものいじめをして、おおかみだけが楽しんでいた」というおおかみに対する考えから、「くまを見習いたい」「やさしくした時の気持ちを知りたい」という気持ちの変容について思考深

場面	発問	発問の意図	
展開	①かさをつかわない時	かさをつかわない時のおじさんの気持ちを考えよう。(基本発問)	大切な物だから使いたくないというおじさんの気持ちを捉えられるようにする。
	②かさをつかった時	かさをつかった時のおじさんの気持ちを考えよう。(基本発問)	使う楽しさに気づいたおじさんの気持ちに共感できるようにする。
	③かさをつかわない時	かさをつかわない時のかさの気持ちを考えよう。(基本発問)	かさの用途に応じた使われ方をしていることを捉えられるようにする。
	④かさをつかった時	かさをつかった時のかさの気持ちを考えよう。(基本発問) かさにとって、1番うれしいことは、どんなことでしょうか(中心発問)。	用途に応じた使い方をし、使うことで大事にすることを捉えられるようにする。

資料5 「おじさんのかさ」の発問の構成



資料6 ワークシートの記述

場面	発問	発問の意図	
展開	①うさぎにいじわるをするおおかみ	うさぎを追い返して「えへん、えへん」と言っているおおかみは、どんなことを考えているのだろうか。(基本発問)	いじわるを楽しんでいたおおかみを捉えられるようにする。
	②うさぎにやさしくするおおかみ	うさぎをだきあげて、「えへん、へん」と言ったおおかみは、どんなことを考えているのだろうか。(基本発問)	いじわるをするより、やさしくする方が気持ちが良くなることを捉えられるようにする。
	③くまに出会ったあと	どうしておおかみは、かわったのだろうか。(基本発問)	くまにやさしくされたことで、おおかみにやさしさが伝わったことを捉えられるようにする。
	④おおかみにやさしくされたうさぎ	おおかみにやさしくされたうさぎは、このあとどうしたでしょうか。(中心発問)	やさしきのつながりを捉えられるようにする。

資料7 「はしの上のおおかみ」の発問の構成

める意見が多く出された。また、授業の振り返りシートの子どもたちの記述（資料8）では、「おおかみに優しくされて、うさぎも優しくしようと思えた」と優しさが続くというねらいに迫る考えも出ていた。

しかし課題として、優しさは次々に連鎖していくということまで広げて考えさせる発問の工夫が不十分であった。

図5は、「道徳の時間の話題についてよく考えているか」と質問した結果である。「よく考えている」と答えた子が検証前に比べて検証後は40ポイント増え62%となり、「考えていない」と答えた子が0%となり、全員が話題について考えるようになった。このことから、子どもの思考に沿って発問を構成し、ねらいに迫る発問を工夫したことにより、子どもが話題を自分の問題として考えられたからだと捉える。また、「自分の意見を発表している」と答えた子が、検証前に比べて検証後は44ポイント増えて65%となった（図6）。友達の意見を聞く時に、自分の意見と比べていない子が、検証前に比べて検証後は12ポイント減って16%となった（図7）。

このことから、思考を深める発問の工夫により、自分の問題としてよく考え、グループでの話し合い活動を通して自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりすることで、多様な考えに触れ思考を深めることにつながったと考える。

資料9は、振り返りシートの記述である。視点を変えさせたり、「やさしさとは何だろう」と自分の言葉で詳述させたりすることで、「かさのほんとうの気持ちは、やくめをはたしたいんだな」「心があかるくなり、いきもちになれること」等、思考の深まりが感じられる記述が見られた。

おおかみくんは、やさしい人だ"とおもった。からじぶんでもやってみよう。

おおかみにされてドキドキしてうさぎさんは、どうすればみんなにかわれるの?と思てうさぎさんがやさしくしてみようかな?と思て、おおかみにやられ、はなはだ"と"な"と分らないから、やさしくした。

資料8 振り返りシートの記述

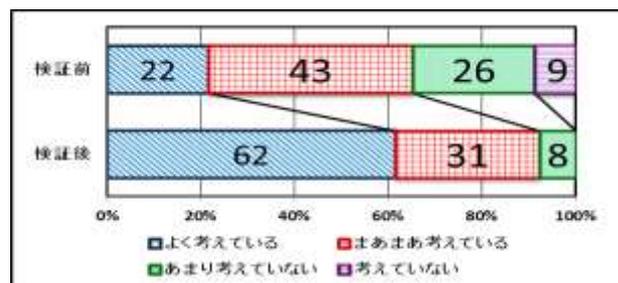


図5 道徳の時間に、話題についてよく考えているか

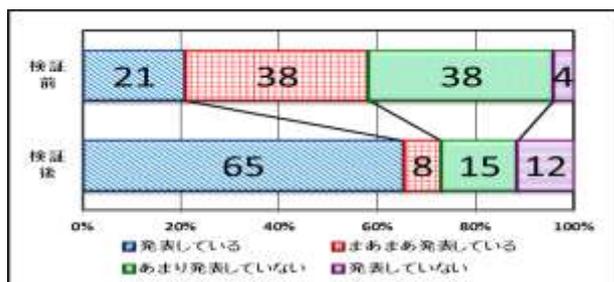


図6 道徳の時間に、自分の意見を発表しましたか

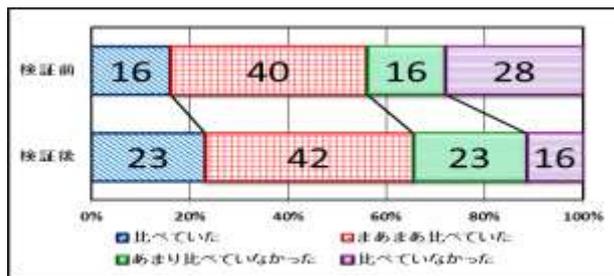


図7 友達の意見を聞く時に、自分の意見と比べていますか

わたしは「おじさんのかさを盗んで気づいたことは、かさの気持ちです。さいしょは、かさの気持ちを考えたら、天啓にしてくれてありがとう。かさとは思っていたと思ったけど、自分のしごとをしていけなかったのが、かさのほんとうの気持ちは、自分のやくめをはたしたいんだな」「心があかるくなり、いきもちになれること」等、思考の深まりが感じられる記述が見られた。

やさしいことは、とても心があかるくなり、いきもちになれるのがやさしいとわかりました。

資料9 振り返りシートの子どもたちの記述

以上のことから、道徳授業において、ねらいに迫る発問の工夫を行うことは、子どもたちが自分の考えを出し合い、多様な考えに触れ、道徳的価値について思考を深めることに有効であると言える。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 資料の特質を活かしながら授業のねらいを設定し、そのねらいに迫る発問を構成することで、多様な考えを引き出し、思考を深めることができた（V-1）。
- (2) 授業授業において、ねらいに迫る発問を工夫することで、個々の考えを出し合い、多様な考えに触れ、道徳的価値について思考を深めることができた（V-1）。

2 今後の課題

- (1) より思考を深められるよう、具体的に視覚や聴覚、体感覚を問うような発問の精選が必要である（IV-3(1)）。
- (2) 自分の問題として考えさせるために、子どもの生活経験、意識や考え方の実態を把握し、思考の深まりを分析しながら、授業の主題やねらいを設定する（V-1）。

<主な参考文献>

北川達夫・平田オリザ

『「ニッポンには対話がない」学びとコミュニケーションの再生』三省堂 2008年

文部科学省 『小学校学習指導要領解説 道徳編』 東洋館出版社 2008年

上地完治 「価値多様化社会における学校の道徳教育」 『琉球大学教育学部紀要』第79集抜刷
2011年

上地完治 「『ゆさぶり』と『討議』による道徳授業の意義 ―自由に考えることと
道徳的正しさのパラドクス―」 『琉球大学教育学部紀要』第79集抜刷 2011年

加藤宣行 『道徳授業を変える 教師の発問力』 東洋館出版社 2012年

渡邊満 『「いじめ問題」と道徳教育 ―学級の人間関係を育てる道徳授業―』
ERPブックレット 2013年

眞榮城善之介・上地完治・稲嶺盛久・上地豪・比嘉さやか・新垣博也

「子どもたちに考えさせる道徳授業づくりに関する実践的考察

―資料『はしのうえのおおかみ』の教材研究を通して―

『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』 第21号 2014年

中央教育審議会『道徳に係る教育課程の改善等について（答申）』 2014年

文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 2015年

日本文教教育資料『「特別の教科 道徳」ポイント解説資料』 日本文教出版／秀学社 2015年

坂本哲彦 『「坂本哲彦 道徳・総合の授業づくり」道徳力を高める「授業構成」と「発問」』

<<http://sakamoto.cside.com/>>

長崎県教育センター

『さあ、道徳の授業をはじめよう！』道徳授業の基本と心にひびく工夫

<www.edu-c.pref.nagasaki.jp/cyosaken/h15/doutoku.pdf>